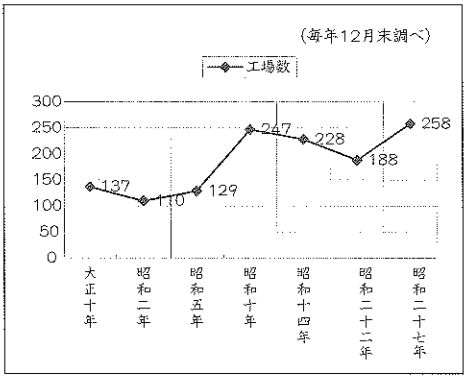
八、大正から昭和へ

1　激しい移りかわり

おさの音高い工業

日清・日露の二大戦争をきっかけにして、日本の工業は急速な発展をみましたが、一九一四年（大正三）に第一次世界大戦がおこると商工業はさらに飛躍的な発展をとげ、大野の織物業界は好景気になりました。戦争が始まった直後は、織物の輸出先を失ってどの工場もやむを得ず休業におちいりましたが、大正五、六、七年と輸出高はしだいに増えてきました。特に一九一九年（大正八）を頂点として、アメリカ向けの羽二重輸出高が増え、織物業界は今までにない好景気となり、一九一五年（大正四）から一九一九年（大正八）までの五年間の輸出合計額は五十四億円にも達しました。これは戦争前の十年間分の輸出額にあたるそうです。工場数も百三十に増え、業者数は百



大野郡の織物工場数（旧『大野のあゆみ』より）

社、設備台数は二千台を越え、設備を新しくするものが相次いで現れました。

その後、設備が電動機に切りかえられ、織物業界の一大革新となりました。明るい電灯の下で夜でも作業が続けられることもあり、本格的に生産能率を高めながら、戦争景気に乗っていきました。絹織物一匹（布地二反）の値段が大正の初めには十三円であったのが、一九一九年（大正八）には急に四十四円にあがり、資本家である機業家の収入は三倍余りに増えました。福井県は全国の絹織物輸出額の六十パーセントを占めるようになりました。

秋の取り入れがすんで長い冬がくると、村々から主婦も娘もそろって工場に集まりました。底冷えのする寒さの中でも織機を動かし続け、早朝から夜遅くまで働きました。職工の賃金は二倍以上にもなったといいます。

こうした織物業界の発展には、地元の銀行との関係を忘れてはなりません。当時の大七銀行系の業者は、県内各業者にさきがけて、大野織物信用購買利用販売

織物工場（旧『大野のあゆみ』より）

組合をつくり、協同して原料を購入したり製品の協同販売を始めました。

一九一七年（大正六）には、亀城銀行系の業者も、大野共益織物信用購買販売組合をつくり、業者どうしの助け合いをすすめ協同販売をしました。

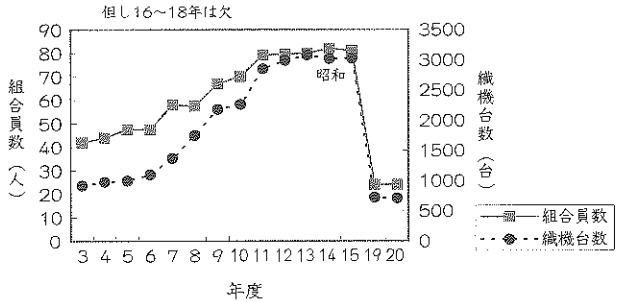
おしよせる不況の嵐　第一次世界大戦が終わると、羽二重輸出は全くふるわなくなりました。一九一九年（大正八）、大戦後の講和条約が成立し、各国の産業がもとのように立ち直ると、日本の工業製品の売れ行きは悪くなり、海外市場への輸出は減っていきました。しかし各工場では、急に設備を縮小することができないので、十分な利益をあげられないまま生産を続けました。一九二〇年（大正九）から一九二一（大正十）には、世界全体が不景気の波に襲われました。県内でもいくつかの銀行がつぶれ工場が倒産し、商人の夜逃げが続きました。郡内では一九一九年（大正八）百七十軒あった業者が、一九二三年（大正十二）には六十軒も減り、休業状態の工場が多くなり

大野織物組合事務所（昭和初めごろ）
（『大野紹介寫眞帖』より）

ました。あまりにも景気の移りかわりが激しい時代でした。

不況をのりこえる努力　しかし各業者は、この不景気をただ手をこまねいて見ているだけではありませんでした。一九二七年（昭和二）、組合の事務所が移されるのを機会に、大野の織物業者の団結をはかるため、新しく大野織物信用購買利用販売組合をつくりました。不況の波を乗りこえるため、県でも対策がこうじられましたが、新しい組合は、人絹（人造絹糸の略　レーヨンのこと）織物への転換をはかりました。当時、人絹は水に溶けるとか、なめると切れるとかいわれていました。そのようなとき、組合事務所で新しい人絹糸の展示会を開いたところ、業者にその良さが認められました。

その後人絹織物の生産は急にすすみ、年を追って盛んになりました。一九二八年（昭和三）には絹織物の生産高を追いこし、一九三〇年（昭和五）には全国の三分の二を占めるまでになりました。初めは「絹のまがい物だ」と非難されましたが、たゆまない研



織物組合員数と織機台数の推移（昭和3～20年）
（『大野織物産業のあゆみ』より）

究によって改良が加えられると、「安くて美しい織物」というので、人々の評判は人絹織物に集まりました。一九三二年（昭和七）の業者は五十七軒、織機は千三百九十六台となり、一九二七年（昭和二）からみると、業者数は三十七パーセント、織機台数は五十パーセント増加しました。海外からの注文も増え、羽二重成金時代にかわって、人絹王国の名をほしいままにするほどになりました。

一九三一年（昭和六年）ごろは、満州（中国東北部）や東南アジアへの輸出がのびて生産はさらに向上しました。全国の輸出織物の大部分を、チリメン・ボイルなどが占めていました。

苦しい農家のくらし　第一次世界大戦後、不況によって大きな影響を受けた農村では、米をつくっても米が食べられないという状況が続き、農村問題が政治で大きくとりあげられました。日本の資本主義体制は、大正・昭和にかけて都市の発達をうながしましたが、農村の生活は従来通りのものでした。一九一九年（大正八）ようやく値上がりした米の値段も、不景気の嵐によって翌年は急に半分に値下がりしました。米価はがた落ちしましたが、日常生活品はあまり値下がりしなかったので、農家の生活はさらに苦しくなりました。この状況は約十年間も続き、給料生活者と農民との収入のバランスは合わなくなりました。その結果、一

九三一年（昭和六）ごろを頂点（ちょうてん）として、くちべらしとして都会へ働きに出る者が多くなりました。また生活が苦しいことから中学校へ進学する生徒が少なくなったので、教師が各農家を回り歩いて生徒を募集（ぼしゅう）したといわれています。

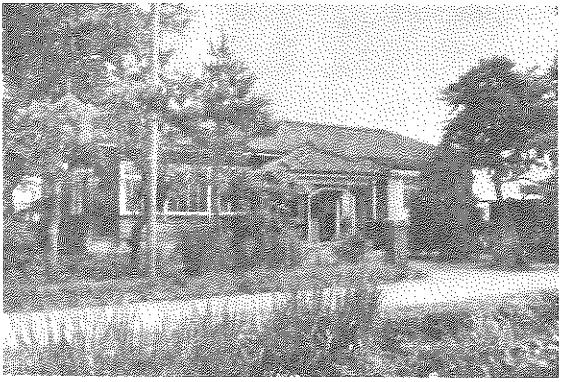
大野では郡農会が総会（そうかい）を開き、「農家の税金を軽くしてほしい。米の値段を高くしてほしい。」など決議文（けつぎぶん）を政府に出すなどの動きがありました。

昭和に入っても米の値段は下がり続け、一九一九年（大正八）の三分の一にま

年次	1俵の代金	年次	1俵の代金
明治 5年	1円 55銭	大正 11年	9円 60銭
6	1. 89	12	13. 00
7	2. 91	13	15. 00
8	2. 91	14	13. 50
9	2. 01	15	12. 60
10	2. 22	昭和 2年	11. 00
11	2. 41	3	10. 30
12	3. 16	4	10. 40
13	4. 19	5	6. 60
14	4. 20	6	6. 80
15	3. 54	7	8. 10
16	2. 58	8	7. 80
17	2. 04	9	10. 80
18	2. 61	10	11. 00
19	2. 26	11	11. 20
20	2. 00	12	12. 60
21	1. 75	13	13. 20
22	2. 85	14	16. 60
23	2. 45	15	16. 50
24	2. 83	16	17. 20
25	2. 72	17	17. 20
26	2. 90	18	18. 40
27	2. 90	19	18. 40
28	3. 64	20	25. 00
29	4. 64	21	200円
30	6. 15	22	700
31	3. 52	23	1,470
32	4. 20	24	1,461
33	4. 40	25	2,515
34	4. 16	26	2,882
35	6. 00	27	30,888
36	4. 64	28	3,378
37	4. 82	29	3,746
38	5. 50	30	4,000
39	5. 92	31	3,926
40	5. 88	32	3,996
41	4. 80	33	3,998
42	3. 90	34	4,024
43	5. 00	35	4,040
44	6. 00	36	4,298
45	8. 20	37	4,741
大正 2年	7. 70	38	5,199
3	4. 00	39	5,941
4	4. 80	40	6,397
5	6. 00	41	6,927
6	8. 80	42	7,761
7	14. 60	（備考）米の代金は2重俵 3等米奨励金なし	
8	20. 00		
9	10. 80		
10	15. 00		

米の値段の移りかわり
（旧『大野のあゆみ』より）

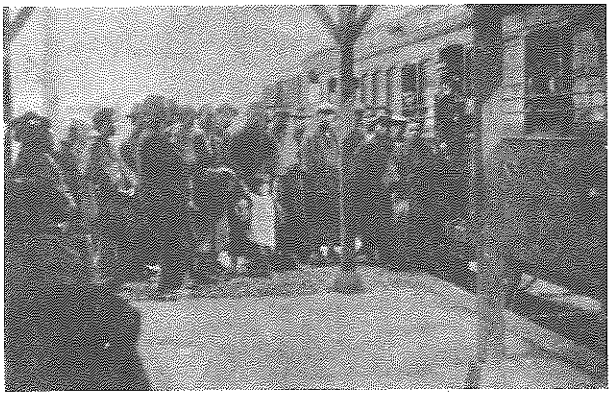
で暴落しました。これでは農家がどんなに節約しても生活が苦しく、農山村は日々にさびれ、人口はしだいに都会に集中しました。その後、太平洋戦争が始まり戦争が長びくと、これに必要な食糧と、農村青年の出征による労力不足から、食糧はしだいに不足がちになりました。そのため、農産物の値段は年々上昇し、十年前の不況とは正反対に、農村はにわかに忙しさをましてきました。


農事試験場（下据）（旧『大野のあゆみ』より）

生産を高める工夫　一九三七年（昭和十二）、下据に農林省指定の雪害を防ぐための農事試験場が設けられ、農業技術の研究がすすめられました。また技術員を村ごとにおいて、良い品種の普及にあたらせたり、副業や特産物の生産を奨励したり、共同作業をすすめるなど、農業経営全体についても広く活動しました。

農家では、用水路の改修を道路の改修以上に重視し、それにかける経費と労力は惜しみませんでした。郡内には大小八十七におよぶ用水路があり、毎年その改修には多額の経費を払っていました。しかも、

上庄・大野・下庄の水田をうるおすための堀兼・大井・明後の三用水には、長い間課題がありました。どれも五条方で真名川の水をせきとめて水をひいていましたが、洪水のために堤防が崩れたり、干ばつの時には水げんかがおきて流血事件があったりしました。しかし、一九三七年（昭和十二）に五条方発電所工事が開始されたのを機会に、その放水を灌漑用水に利用しようと考えました。こうして、戦後ようやく用水問題は解決の糸口が見られるようになりました。



大野三番駅（大正ごろ）（写真：谷口栄氏提供）
（旧『大野のあゆみ』より）

2　発達する交通・通信

京福電鉄の開通　面谷鉱山の銅鉱や木材薪炭などの資源が豊富で、絹織物の産地でもあった奥越と福井を結ぶ鉄道を敷設する動きは、明治時代半ばにはすでにおこっていました。北陸本線が敦賀、福井を経て森田まで開通した一八九六年（明

治二十九)、大野郡長の山田卓介たちが、福井から勝山を経て大野にいたる電車を走らせようと計画しました。また、一九〇一年(明治三十四)には藤野市九郎たちが、再び電車を走らせようと計画しましたが、資金調達面で挫折し実現にはいたりませんでした。

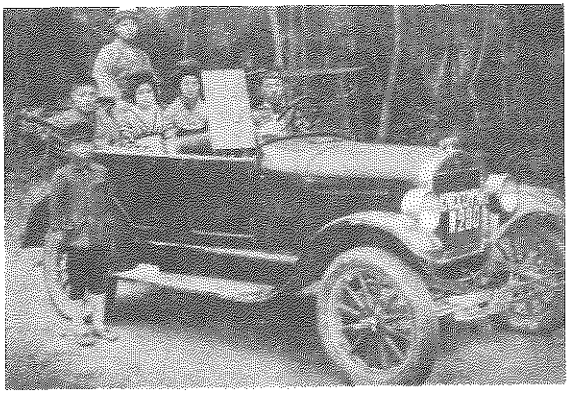
しかし、一九〇八年(明治四十一)、当時の県知事や県議会議長たちが京都電燈株式会社へ鉄道の敷設と補助金の交付を持ちかけたところ、京都電燈株式会社にとって余剰電力の活用は魅力的な選択肢だったことから一気に話がすすみ、一九一四年(大正三)四月十日、新福井―大野口間が開通しました。当時の社名は越前電気鉄道といい、北陸地方では最初の私鉄でした。開通当時は福井口・松岡・勝山など十六駅がつくられましたが、車両台数はそれほど多くありませんでした。一九一八年(大正七)九月一日には、大野口駅が大野町の郊外だったため市街地まで約三百メートル延長され大野三番駅が開業しました。その後京都電燈株式会社は下荒井トンネルの付けかえやS字カーブの改修など所要時間短縮に取り組み、当初二時間

種類＼年代	開通当時 大正3年	昭和24年 12月末	昭和43年 3月
機関車	1	9	9
客車	10	電動 39 付随 15	電動 49 付随 6
貨車	13	電動 2 付随 85	有蓋 11 無蓋 9

京福電鉄会社の車両台数
(旧『大野のあゆみ』より)

要していた福井―大野三番間が一時間二十分までに短縮されました。戦時下の一九四四年（昭和十九）十二月一日には、国策により福井県北部の私鉄四路線が一つの会社にまとめられ、京福電気鉄道株式会社が誕生しました。

はじめての乗合自動車　大野に初めて自動車が走ったのは、一九二三年（大正十二）、勝原で白山水力株式会社が発電所工事で使うためでした。それから間もなく、加藤バスが乗合自動車の営業を始めました。最初の自動車は、外国の中古車一台を、八百円で購入したもので、大野―勝原間を一日四回往復しました。運賃は五十銭でした。道幅が狭いのでところどころに待避所をつくりました。その後、苦労を重ねながら湯上、朝日（和泉村）、白鳥町（岐阜県郡上市）へと運転距離を延ばしていきました。



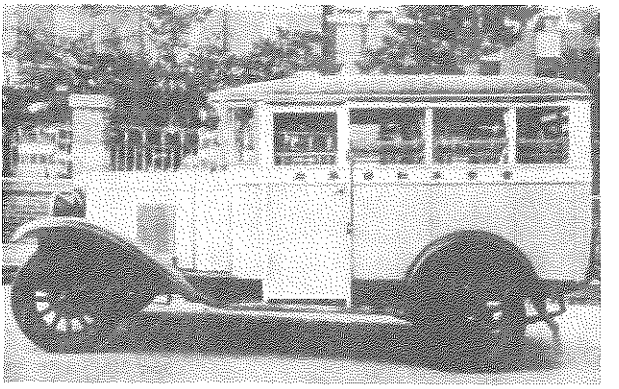
はじめて大野を走ったバス（大正12年ごろ）
（写真：加藤哲次郎氏提供）（旧『大野のあゆみ』より）

当時の人々は、自動車のまわりに集まってもの珍しく眺めたといいます。また一方では、馬車や人力車などの業者から商売がたきが現れたとして反発され、道をよけてくれないので困ったことも

あったそうです。

昭和になってからは阪谷や西谷方面にまでも路線を増やし、その後、西谷の水浦バスとともに県内のバス会社が統合されました。

このバス運転にともない、トラックも増え、奥越地方の物資の輸送に重要な役割を果たしました。しかし戦時中はガソリンが不足したので、車体の後ろにガス発生炉をとりつけた木炭自動車が走りました。戦時中、車は古く、ガソリンはなく、代用燃料も乏しく、部品の取りかえもできず苦労しました。

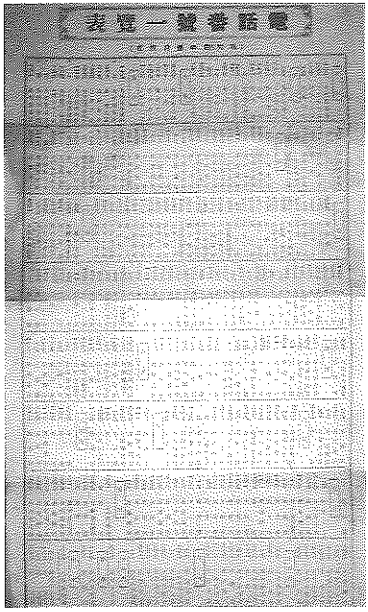


加藤商会バス（大正ごろ）
（写真：加藤哲次郎氏提供）（旧『大野のあゆみ』より）

珍しかった電話　一八九一年（明治二十四）の秋、福井から大野まで電話線が張り渡されました。広い水田を横切って、一直線に立ち並ぶ電柱は田園風景の一つとなり、子どもたちは喜んでこれを数えたり絵にかいたりしました。電話は、大野から勝山や福井、金沢など十一ヶ所と通話できるようになりましたが、初めのうちはゴトゴトいってなかなか聞きとれず、ま

た、慣れないためにあらたまりすぎて、話の途中に時々受話器におじぎをするなど、笑い話になるような情景もあったそうです。

電報の取り扱い　明治時代に電報を取り扱っていたのは、大野・勝山・中島・面谷（和泉村）・下山（和泉村）の五局にすぎませんでしたが、昭和になってからはすべての郵便局でこれを取り扱うようになりました。



電話番号一覧表（昭和４年）

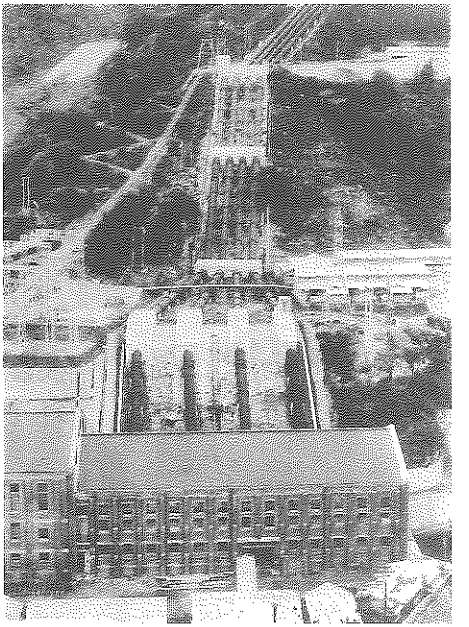
３　すすむ郷土の開発と商業の発達

相次ぐ発電所の建設　第一次世界大戦が始まると国内産業が急に盛んになり、最初は照明用に使っていた電気が、機械工業の動力源として利用されるようにな

りました。羽二重織りの力織機も電力に切りかわって、本格的な生産向上をもたらすようになり、昼夜の別なく電力が消費されました。そのため空前の電力不足となり、発電所の建設が急にすすめられました。

一九一五年（大正四）から一九一九年（大正八）にかけて県内各地に八つの発電所が建設されました。一九一九年（大正八）に完成した大同水力株式会社（現在の北陸電力株式会社）西勝原第二発電所は、そのころ福井県最大の発電所で、武生肥料会社や越前電気会社、京都電燈会社に電気を送りました。その後一九二三年（大正十二）には、白山水力株式会社（同北陸電力株式会社）が西勝原第一発電所を建設し、名古屋電力や大同肥料武生工場、京都電燈など、県内外送電用として活躍し始めました。

ひとたび荒れると、田畑や家屋を流して、人や家畜の命を奪ってきた河川は、



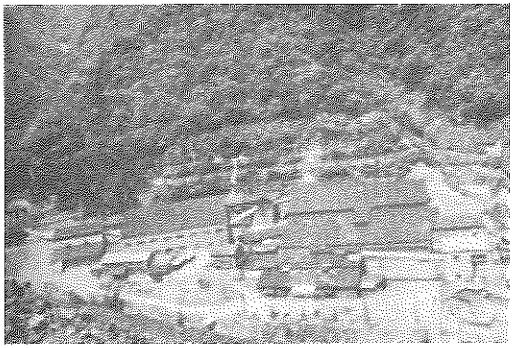
西勝原第一発電所（昭和初めごろ）
（『大野紹介寫眞帖』より）

水力発電への利用やえん堤建設により、水害も減りました。戦争が始まると、軍需生産が増えて電力の需要が高まり、さらに発電所の建設がすすめられました。

開発のめざましい中竜鉱山　中竜鉱山は、今から約七百年前に発見され、江戸時代の末ごろには近くの村民が採掘していたと伝えられています。

明治になって手掘採鉱をしましたが成功しませんでした。日清・日露戦争のときは鉛・銀・亜鉛などを掘りました。一九一〇年（明治四十三）になって大阪亜鉛鉱業所が掘り、一九一三年（大正二）ベルギー人グレーゴウルの資本によって採掘しましたが、その後休業しました。一九二六年（大正十五）、技師風岡英次の努力によりさらに深く掘りさげられました。一九三四年（昭和九）には、日本亜鉛鉱業株式会社ができ、資本家の中村房次郎、持主の竜田哲太郎の頭文字をとり、「中竜鉱業所」と名付けられました。

一九三五年（昭和十）からは最新式の機械によって本格的に掘りさげ、選鉱場も完成しました。戦争が激しくなると重要鉱山に指定され、増産する命令が出さ


中竜鉱山（昭和40年代）（旧『大野のあゆみ』より）

れました。

かわりゆく商店街　城下町として栄えた大野は、南北に一番・二番・三番・四番・五番通り、東西に七間・八間・石灯籠通りなど、L字・T字の街路を定めた方形の町でした。明治時代になり、山村や農村との間で肥料・日用品・食料品などの取り引きが多くなると、大野町の商業は活発になり、手工業者の多くも商売を始めるようになりました。

その後、大正の初めに福井市との間で電車が開通し、その終点駅が三番通りの北端につくられると、菓子や青果、魚、肉などを売る店が増え、急に賑やかになってきました。商業の中心はしだいに一番通りから三番通りや七間通りに移っていきました。

商圏の移りかわり　大野町は、明治以後も奥越地方の中心として活気がありましたが、一八八八年（明治二十一）、一八九九年（明治三十二）の二度の大火によって、町民は財産を一度に灰にしてしまいました。そのため廃業する者、よそへ移住する者が相次ぎ、町の中心以外は復興が遅れました。しかも山間の小都市であるためまわりに農村しかなく、外からの刺激や競争も少ない、小さな家内的商業中心の町となりました。

番号	業者名	戸数	番号	業者名	戸数
1	青物荒物	54	17	かや	5
2	穀物	53	18	綿・真綿	6
3	さし物大工	33	19	みそ・醤油	8
4	氷・雪・牛乳	33	20	魚鳥獣肉	8
5	材木・板	32	21	たばこ	9
6	小間物	31	22	せともの	9
7	太物織物	25	23	金物	8
8	とうふ	25	24	薪炭	6
9	油・ろうそく	12	25	本屋・古本	4
10	菓子・砂糖	15	26	ちょうちん・傘	1
11	肥料	20	27	たんすや	2
12	売薬	60	28	おけや	13
13	はき物	24	29	和洋酒	13
14	呉服	5	30	ひもの屋	14
15	洋服帽子	4	31	寒暖計・めがね	2
16	蚕種・まゆ	6	32	こんにゃく・めん類	3

大野町の商店の数（明治45年ごろ）
（旧『大野のあゆみ』より）

大正になって道路が整い、交通機関が発達するにつれて、しだいに大野町の商圏（その町の商品を売り買いする範囲）もかわってきました。上穴馬村（和泉村）や下穴馬村（和泉村）は、それまでは大野町と物品の売買をおこなってきました。しかし、県境の油坂峠のトンネルが一九三九年（昭和十四）に拡張されてトラックやバスも通行できるようになると、岐阜県白鳥方面から日用品などが売りこまれ、上穴馬では岐阜県版の新聞を読む人も出てきました。つまり大野町の商圏がそれだけ白鳥町（岐阜県郡上市）に奪われたわけです。以前は大野郡の一部であった芦見や羽生、味見（美山町）も、福井との交通が便利になったので、大野との取り引きは少なくなり、直接福井と取り引きをするようになりました。商圏は、行政区がかわることと、交通機関の発達に影響されることが多いといえます。

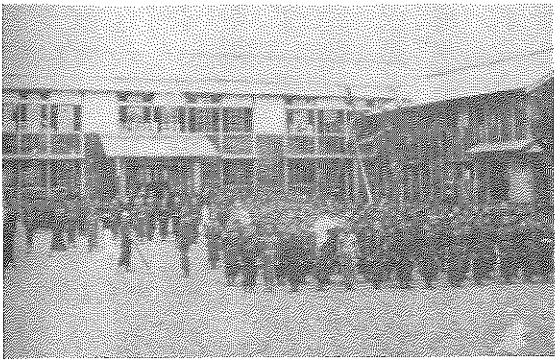
取り引きの改善　太平洋戦争が始まるまでは、大野地方の取り引きは、たいへんのんびりしたものでした。商品の現金売りが少なく、ほとんどが「つけ」で売られていました。その代金は、盆と暮れの年二回集金に回りましたが、その時都合が悪いと、また半年集金が遅れるという状態でした。これは商人にも客にも損な方法でした。客は、原価に半年の利息を加えた割高の品物を買わなければならず、商人は、資金の回転が悪く、年間の売り上げ高も利益も少なくなりました。

やがて戦争が始まって厳しい統制がおこなわれるようになると、主食や副食、衣類などは配給切符と交換する制度になりました。そのため、商人の中には、廃業する者、転業する者が出てきましたが、その反面、品物は必ず現金と引きかえにしか渡さないようになりました。この制度が数年続く間に、人々の間には「商品は現金で買うもの」という習慣ができ、資金の回転も前にくらべてよくなっていきました。その後、月末に集金をする方法がおこなわれるようになりました。

4　大正・昭和の教育

充実する学校　日清・日露戦争が終わってから、人々は「教育は何よりも大切である」ということを強く感じました。一九〇七年（明治四十）には、義務教育の年数が六年にのばされ、小学校教育はますます充実してきました。学校へ入学する者は、男九十八パーセント、女九十七パーセントにまでなりました。

一九二一年（大正十）には、尋常科六年（義務教育）の次に、高等科二年または三年が設けられました。その後、道路や橋が直され交通が発達すると、学校も



伏石小学校（写真：松村利章氏提供）
（旧『大野のあゆみ』より）

大正時代の体育会（有終男子校）
（旧『大野のあゆみ』より）

統合され一村一校が普通になってきました。

このころは体育教育が重視され、どこの学校でも体育会や学芸会はともに年中の二大行事となりました。高学年男子の兵隊ごっこ、女子のダンスが体育会のはながたで、家の人も半日は仕事を休んで参観しました。

盛んになった郷土教育　昭和にはいって、各学校の教育は大きな進歩をとげました。どの学校も優れた教師がそろい、学習指導の研究などが熱心にすすめられ、子どもの能力にふさわしい学習をさせるように努められました。体操では球技が取り入れられ、ドッジボールやバレーボール、バスケットボールが盛んにおこなわれ、遊戯も取り入れられて、体育会はさらに賑やかにおこなわれました。「サイタ　サイタ。サクラガサイタ。」などと書かれた色彩鮮やかな教科書は、子どもたちの勉強への意欲をかりたてました。

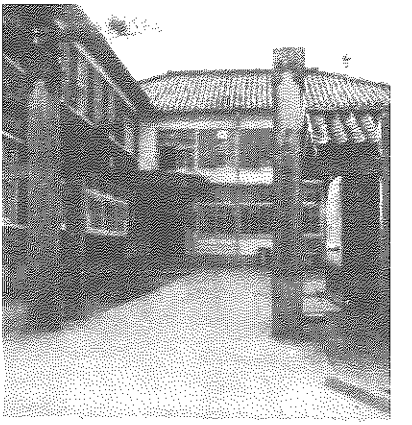
また、どの学校にも郷土室がつくられ、郷土の地理・歴史などの資料がたくさん準備されたのもこのころです。

農業の担い手を育てた農林学校　第一次世界大戦のあと、工業はめざましく発展しましたが、農業はのび悩んでいました。農村の行きづまりを打ち破るため、「農業を重んじる政策」が強く叫ばれました。

このような時代の中で、一九三〇年（昭和五）、下庄村では村の運命をかけて新しい農業の担い手を育てようと、「下庄村公民学校」がつくられました。その後一九四二年（昭和十七）に「村立大野農学校」となり、三ヘクタールの実習地を持ち、米や麦をはじめ、たばこや野菜の栽培方法を教えました。男女別の小学校があった時代に、時代に応じた農業知識と技術を教える男女共学の農学校は全国でも珍しいものでした。

その後、一九四四年（昭和十九）、「福井県立大野農林学校」となり、「あの学校を卒業すればいいあと継ぎができる」といって広く県下に認められ、各町村から数多くの生徒たちが入学を志しました。女子生徒も、男子生徒と同じように農業実習に汗を流し、林業科の生徒たちは、平泉寺（勝山市）の演習林でやぶ蚊と戦いながら、立木計算や土地測量を実習しました。戦後六・三制が実施されて大野高等学校北校（農林科）として統合されてからも、農業教育の学園として続きましたが、わずか六年で本校に吸収され、校舎はそのまま下庄中学校に引き継がれました。

5　太平洋戦争と大野



大野地方事務所
（旧『大野のあゆみ』より）

強まる戦争へのかまえ

一八七八年（明治十一）、県の下に郡や町村がおかれてからは、郡役所は県と町村との中間にある行政機関となっていました。しかし、郡役所の役割が少なくなったため、一九二六年（大正十五）郡の制度は取りやめられ、それまで郡役所が受け持っていた仕事は、県や町村で分けて受け持つことになりました。

その後、一九三七年（昭和十二）におきた日中戦争が長期化してきたため、政府は一九三八年（昭和十三）に「国家総動員法」を制定し、国をあげて人と物との両面から戦争に取り組む姿勢を強く打ち出しました。しかし、これまでの組織では、国の考えが計画的に町村民までに行きとどくことが期待できず、そのため、戦時下の統制強化のために、一九四二年（昭和十七）に県と町村との間に地方事務所をおき、増産運動や貯蓄運動、遺族を守る運動などを強くすすめました。ついで毎月一日を「興亜奉公日」に定め、この日は特に早起きをし、緊張した生活

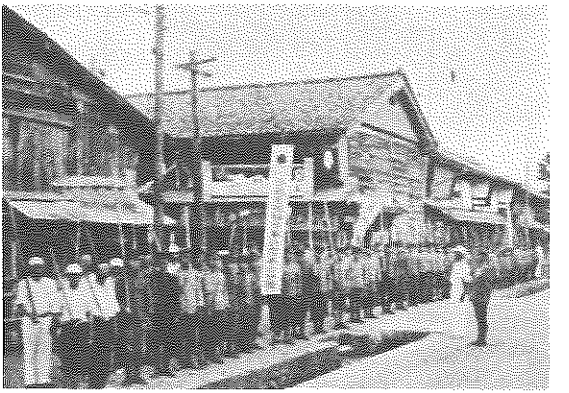
をすることを求めました。

一九四〇年（昭和十五）には、「大政翼賛会」がつくられ、心をひとつにして国にむくいるよう強く呼びかけられました。また、町内会や隣組制度、防空防火、貯蓄、生活刷新、生活品の配給など、すべてにわたって協力体制がつくられました。

出征兵士の見送り
（写真：宮山朗氏提供）
（旧『大野のあゆみ』より）

戦争の激しさ　日中戦争が始まると、多くの出征兵士が、大野三番駅（京福大野駅）から家族や町内の人々から見送りを受けて出発して行きました。やがて中国の各地で日本軍は勝利をおさめ、それを祝う旗行列や、ちょうちん行列が町の通りを埋めました。

この戦争は、やがて世界の国々を相手とする太平洋戦争へと広がっていきました。町や村々の若い人たちは、ぞくぞくと戦地へむかいました。大野三番駅前は、毎日出征兵士を送る勇ましい軍歌や万歳の声がどよめき、日の丸の旗で埋まりました。これらの兵士たちは、中国や東南アジアで戦いました。南京（ナンキン）・



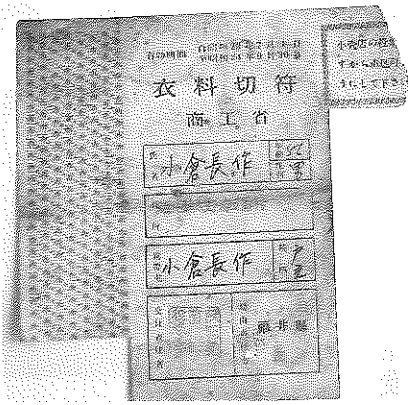
勤労奉公団（青年学校生徒）
（写真：鎮西一雄氏提供）（旧『大野のあゆみ』より）

武漢（ウーハン）の陥落、真珠湾の攻撃、シンガポール占領などのニュースが伝わるたびに、人々は喜びに沸きました。

しかし戦争が長びくにつれて、資源の乏しい日本は、生産力をほこるアメリカにしだいに反撃されるようになってきました。戦いが不利になるにつれて、太平洋の島々を守っていた日本軍の全員戦死という悲しいニュースなども、相次いで伝えられるようになりました。大野でも多くの戦死者が出て、軍歌や万歳で勇ましく送られた兵士の遺骨が、白木の箱におさめられて無言の帰宅をするようになりました。大切な家族を失った遺族は、悲しみをこらえて我慢しました。

ぜいたくは敵だ　国をあげての戦争にあたり、国内に残る人々もたいへん苦しい生活をしました。戦争が長びくにつれて自由がなくなり、日常生活にもその影響があらわれてきました。一九四一年（昭和十六）には、生活に必要な物資の統制が始まり、まず、主食の配給通帳制度が始まりました。学校では、青少年団

衣料切符　裏

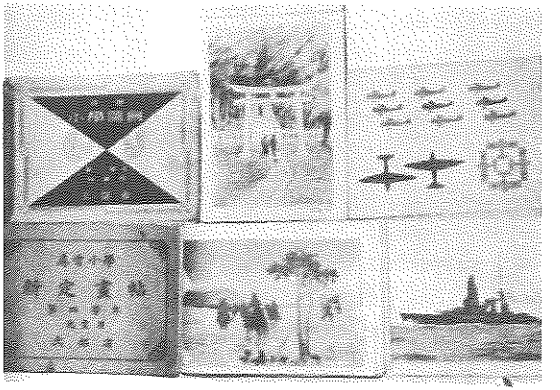


衣料切符　表

や勤労報国隊が結成されました。そしてこの年の十二月八日未明、太平洋戦争が始まると、人々は国をあげての戦いに決意を固めなければならなくなりました。戦争に勝つことにすべてがかけられました。そのため生産は戦争に必要な物資に限られ、日常生活に必要な品物は不足していきました。「ぜいたくは敵だ」「欲しがりません勝つまでは」などの合い言葉で、人々は不自由な生活を我慢しなければなりませんでした。

米の配給制に続いて、マッチや木炭、砂糖や塩と、つぎつぎに配給制になり、一九四二年（昭和十七）からは、みそやしょうゆ、さらに衣料品も切符制になり、国民一人あたりの消費量が点数で制限されました。手ぬぐい一本二点とか、品種別に点数が定められました。一人あたり年間百点までしたが、一九四四年（昭和十九）には半分の

五十点になりました。商店では売る品物も少なくなって休業状態になり、かわりに工場へ働きに行く人もでてきました。また、軍用品などをつくるための材料不足を補うため、火ばちや仏具、寺のつり鐘やなべ釜など鉄の物は全部供出されました。また新聞紙も不足し、県内の新聞は福井新聞一紙にまとめられて、枚数も一枚ほどになって発行されました。

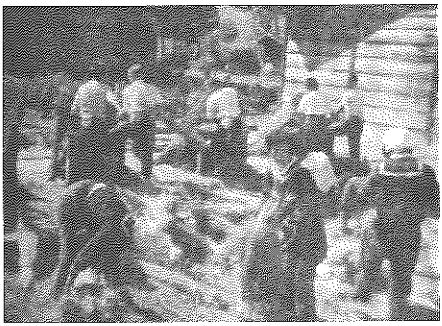


戦時中の教科書
（写真：松村利章氏提供）（旧『大野のあゆみ』より）

国民学校うまれる　一九三七年（昭和十二）の日中戦争を境にして、教育の姿は大きくかわっていきました。一九四一年（昭和十六）に、近い将来に予想される大きな戦争のために、およそ七十年の長い歴史を持ち、人々から親しまれてきた小学校が、皇国民をつくりあげることを目的にした国民学校に改められました。今までの教科が再編され、国民科・理数科・体錬科・芸能科になりました。体練科には新たに武道が加えられ、高学年には柔道や剣道をさせました。乾布まさつや相撲もやり、女子はなぎなたもおこないました。また、「体力

検定」といって、体力や技能を磨く検定も導入されました。このように、教育の内容がすべて戦争へつながるものに切りかえられ、教科書は軍事色の強いものが使われ始めました。

生徒も工場へ　戦争が始まり、主な働き手である男子を戦場へ送り出したので、農村や工場では人手が不足してきました。そのため労働力の中心は男子から女子へ、青年から老人へ、あるいは学生へと移っていきました。

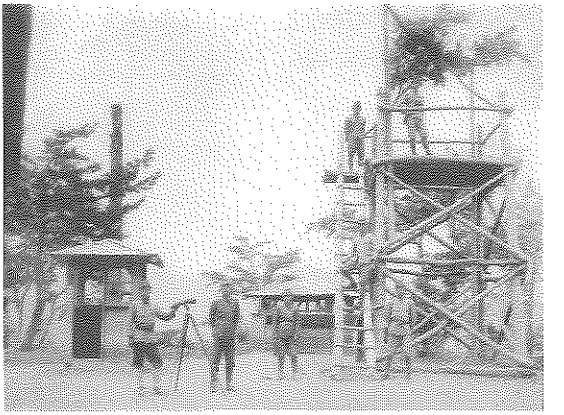


農家への勤労奉仕
（旧『大野のあゆみ』より）

一九四二年（昭和十七）になると、各織物工場は軍需工場に転用するよう国から指示されて、航空機の部品・兵器部品・海軍用寝台・鉄道の枕木などを生産するようになりました。

一九四三年（昭和十八）、政府は生徒たちも工場で働くようにと、学徒動員の命令を出し、翌年には中等学校以上の生徒が対象となりました。大野中学校の上級生徒百名は、名古屋市の愛知航空会社で飛行機生産に力をつくしました。下級生や女学生は、軍の指定工場であった勝山の松文産業や、その他の軍需工場へ行

ったり、出征家庭の稲刈り奉仕などに汗を流しました。大野農林学校の生徒は、北海道まで行き農業の手伝いをしました。また小学校高学年の生徒は、教師と力を合わせて、慣れない手つきで田植えや稲刈りに精を出しました。校庭などの空き地はすべて掘りかえして、いもやかぼちゃなどをつくり、食糧増産に励みました。



亀山の空襲見張り台

空襲にそなえて　一九四四年（昭和十九）の夏ごろから、アメリカによる本土爆撃が激しくなってきました。東京をはじめ、主要な地方の都市がつぎつぎに空襲を受けたので、大都市の小学生は、両親のもとを離れて地方に集団疎開を始めました。

大阪市城東国民学校は六間通りの花月旅館へ、布施第六国民学校は最勝寺（上据）と専福寺（友兼）へ、約四百名が疎開してきました。宿舎の世話から授業のこと、日常生活品や食糧の手配など、細かい心づかいがなされ、受入れ側の苦労もなみたいていではなかったといわれています。

福井市は一九四五年（昭和二十）七月十九日の夜、空襲によって市街地の大半が焼失し、引き続いて敦賀市も空襲を受けました。大野でもいつおしよせるかわからない敵の飛行機におびえながら、家の前には防火用水や火たたき、砂袋、むしろなどが用意され、町内会や隣組で防火訓練がおこなわれました。町の空き地や亀山のふもと、神社や寺の境内など、いたるところに防空壕がつくられましたが、大野は幸い空襲の被害を受けずに終戦をむかえました。